



昨年冬に取得した山での、今後の活動をイメージしたものです。

森と人々が豊かになれる関係づくりを一。 濱田智子^{ともこ}さん(末広)

道内のアルプホルンの制作愛好家らで作る「森林(もり)のハーモニスト」代表。今年1月に、弥生の商店街活性化センター「あえ〜る」を会場に、全長約3メートルの手づくりのアルプホルンなどを展示。浦河町出身。夫・革(かく)さん、子・芽生(めい)さん、雪大(ゆきひろ)くん、一華(いちげ)さん、犬のリッキーくんの6人(?)暮らし。



全長約3mものアルプホルン

「子供の頃、家の近くの森に入ってよく遊んでいました」と話す濱田智子さん。

濱田さんは平成12年に結成した、道内のアルプホルンの制作愛好家らで作る団体「森林のハーモニスト」(約20人)の代表を務めています。翌年3月には、吹口部・中央部・先端部の3パーツをつなぎ合わせ、全長約3メートルものアルプホルンを同会で完成させました。

結成直後に講師を招き、アルプホルンづくりのためのワークショップを開催して主に先端部分を作り、その後、2カ月に1回ほどの講習会を開きながら、翌年までに約1年間かけて作製したものです。

「ホルンづくりをするようになってから、ホルンの吹き方や木の削り方などについて教わったりなど、音楽・木工に関わる方との人の輪がずいぶん広がりました」と笑います。

今年1月には弥生の商店街活性化センター「あえ〜る」を会場に、完成したホルンを展示。息を吹いて勇壮な音色を楽しむこともでき、ひととき来場者の目を引き付けていました。

アルプホルンは、かつてアルプスの山々で連絡を取り合うのに使われたと言われていた木管楽器で、山の斜面に生え根本が曲がっている、通称“あて材”と呼ばれる木や材質の悪い木材などを活用して作製。木の内側と外側から、ノミ・彫刻刀を使いながら5ミリくらいの薄さになるまでくり抜いています。

道立林業試験場に勤務している濱田さんは、「良い木を残すには間伐が必要ですが、間伐された木は利用される用途が少ないので、その活用をどうするかが大切なんです。ホルンの材料も、間伐された木を使っているんですよ」と微笑みます。

濱田さんがホルンに関心を持つようになったのは平成10年、神奈川県で開かれた国体のセレモ

ニーの際、118本のアルプホルンを使った演奏会が行われ、その演奏と作製に携わった同県の市民グループとの交流がきっかけです。ホルンづくりだけでなく、“森にホルンの材料を探しに出かけ、自分達が間伐した木で工作を作るなど、木に触れることを通じて森林について学び、人間の暮らしと自然との関わり合いを考えていこう”という目的も兼ねています。

また、全国の女性の林業関係者で構成するボランティア団体「豊かな森づくりのためのレディーズネットワーク21」(約500名)の事務局長を務めたこともある濱田さんは昨年、総合学習の一環として当別小学校で木の葉や鹿の角などを使いながら森林についての授業を行いました。11月には弁華別に山を取得し、「以前、広報誌面で“森あそび入門”というコーナーにて紹介させていただいたように、子供達と一緒に森で楽しめる行事を企画しようと考えています」と意気込みます。

「“森”は、私にとってかけがえのないものです。今も昔も変わりませんが、森に入ると心が癒されます。例えば悩みごと・考えごとなどがあったとき、森の中を歩いていると森の空気を感じながら様々な植物に出会うことができ、気持ちが安らぎます。“森の力”を少しでも多くの人に体感してもらいたいと思っています。当別には森林がたくさんあるので、特に小さな子供達に、そのパワーを共有してもらえよう活動をしていきたいですね」と抱負を話します。

「森」は、私にとってかけがえのないものです。今も昔も変わりませんが、森に入ると心が癒されます。例えば悩みごと・考えごとなどがあったとき、森の中を歩いていると森の空気を感じながら様々な植物に出会うことができ、気持ちが安らぎます。“森の力”を少しでも多くの人に体感してもらいたいと思っています。当別には森林がたくさんあるので、特に小さな子供達に、そのパワーを共有してもらえよう活動をしていきたいですね」と抱負を話します。



当別小での総合学習